

新型コロナウイルス感染症による山口博物館の運営への影響と対応 2021

杉江 喜寿¹⁾

Impact and response to the operation of the Yamaguchi Museum due to “COVID-19 calamity” 2021

Yoshihisa SUGIE

1 はじめに

2020年春から始まった、新型コロナウイルス感染症の世界的な拡大に伴って、当館も多くの影響を受けてきており、2020年度末までの対応や影響については、研究報告第47号（2021年3月発行）ですでにまとめている。

残念ながらコロナ禍は1年で終結することなく、2021年度末にかけてもまだまだ影響が継続しており、今後の見通しも見いだせない状況である。

この前例のないコロナ禍の中で、2021年度も手探りで対応を続けてきたわけであるが、本稿は、当館がどのような影響を受け、それに対してどのような対応をしてきたかを前年に引き続き記録に残しておくものである。その中でも今回は特に、この厳しい状況の中でも前向きに取り組んできた新たな「ミュージックミュージアム in バーチャルやまはく」（2020年度末開始）という事業について本稿後半で詳細に紹介する。

2 これまでの新型コロナウイルス感染症の影響

2020年は、1月に日本国内での初めての新型コロナウイルス感染者が確認されて以来、2月末には全国の小中高等学校が、一斉に臨時休校になるという前代未聞の事態に陥り、当館でも3月には臨時休館となり、それ以来前例のない混乱の中で患者数の増減などに一喜一憂しながら対策に追われた1年であった。

2021年になっても状況は一向に好転せず、全国一律的な休校などはなかったものの、1月に1都3県に出された緊急事態宣言が、すぐに11都道府県に広がるなどし、2月には県間移動の自粛となった。

3月には一度落ち着きかけたが、4月には再び感染が広がり、5月には山口県でも感染拡大防止集中対策として外出機会の半減が開始されるなどしたため、テーマ展「宝山の一角～山大全コレクションin山博」（4月28日～6月20日）は予定通り開催できたものの入館者数は激減した。

1) 山口県立山口博物館（植物）

7月には東京オリンピック、その後にパラリンピックが開催されたが、同時期に感染が再び拡大しており、8月6日開始の特別展「江戸時代の旅と街道」は、開会式こそ無事に終わられたものの新しいデルタ株の広がりにより、8月25日から当県に実施された「デルタ株感染拡大防止集中対策」にともなって同日より休館となったことを受け、止むを得ず開催期間わずか16日間で閉展することとなった。この集中対策は感染が落ち着いてきたことで9月25日には終了し、翌日より開館することでき、10月末からの「サイエンスやまぐち2021」は無事に終了することができた。（ただし科学研究発表会については、発表会自体は開催せずにDVDによる審査のみという変則的な開催となった）。

12月10日開始のテーマ展「動物サポーターの7年（R4年4月10日まで）」は、無事に開始することができたが、新たなオミクロン株が急激に感染を拡大し、1月9日には山口県で初めての、まん延防止等重点措置が本県に適用されるなど再び状況が悪化して予断を許さない状況が続いている（2022年1月末現在）。以上が、コロナ禍における当館のこれまでの影響の概要である。以下にそれぞれの具体的な対応について簡潔に述べる。



画像1 特別展の内容(チラシ裏面)



画像2 特別展開催中の臨時休館

3 コロナ対策の具体的な取り組み

(1) 入館者への対応（特別展を除く通常開館時）

- 入館時に、「体調チェック表（問診票）＆連絡先記入カード」の提出
- 入館時に、赤外線サーモグラフィでの検温の実施
- 館内でのマスク着用をお願い
- 入館時や展示室内での手指の消毒液の利用や、こまめな手洗いの徹底をお願い
- 体験型機器（山口線運転シミュレーター等）の抗菌テープや抗菌剤による対応
- 来館者の人数によっては、入場制限をする
（同時に各展示室20名、計120名程度 2021年11月20日以降は緩和）
- 受付前には、間隔を開けて待つようにフロアマーカーを設置
- 清掃業者による手すりやドアノブなど接触部分の消毒の徹底



画像3 抗菌テープによる対応



画像4 アルコール消毒液の追加

(2) 特別展での対応

- オンラインによる事前予約を優先とし、入館者数の制限を行う。
(15分間隔で定員を設ける。2020年度は20分間隔)
- 事前予約は、スマホなどによるオンライン優先とした。手数料や使用料などの関係で決済についてはオンラインとはしなかった。
(※2020及び2021年度特別展のオンライン予約の状況については、本研究報告の「特別展で実施したオンライン予約について 岩村和政著」において別途詳報している)
- 特別展講座(全5回)については、講座室の定員制限(12名)を受けて、館内の学習コーナーでライブ中継(10名程度視聴)を実施した(2回)。特別展の中止により中止になった3回分については無観客で収録し、特設サイトでオンデマンド配信中である。9月に実施予定であった街歩きイベントはすべて中止し、そのうち親子でのイベント(1回)については教育普及講座も兼ねていたため、2月に延期した。
- 館全体の動線設定と間隔保持のための誘導サイン、フロアマーカー設置
- 火曜日も休館とし、清掃業者による消毒徹底

(3) サイエンスやまぐち2021への対応

- 科学作品展は、開会式・表彰式において小学校児童の招待などを中止し、以下のように総合開会式としたこと以外は例年通り開催した。
- 科学研究発表会については、2020年度同様に発表会は中止してDVDによる映像提出をもとに審査会のみとしたが、開会式・表彰式については、科学作品展と合同で実施して総合開会式とし、優秀作品の映像を科学作品展の会場に展示した。

(4) 当館の行事や活動における感染防止の取り組み(2022年1月20日現在)

(2020年12月末以降のオミクロン株の流行によって、1月20日以降も対応は随時変更になっているので注意)

- 展示機器の利用について

2020年度に引き続き展示観賞中心とし、体験型・接触型の機器は一部を除き使用中止していたが、感染が落ち着いた11月20日以降は、消毒が困難なVR機器などの一部を除き、山口線運転シミュレーターなどの理工体験コーナーの多数や太陽系運行模型など解禁した。

接触面はコーティング剤の塗布、こまめな消毒・清掃などで対応し、社会見学での利用については消毒液の持参を条件に、利用の可否を利用団体の判断によるものとした。

○ 教育普及講座について

全26講座のうち5月6月の4講座のうち季節ものの2講座は中止、2講座は延期した。8月は4講座のうち1講座のみ延期し、9月の2講座のうち、季節もので延期できない1講座は中止、1講座は延期した。(2020年1月末現在)

○ 社会見学など出前授業など団体での利用について

2020年度と同様の対策を実施して対応した。感染拡大時には来館予約や出前授業のキャンセルが一部であったが、全体的には昨年より利用者が増え、回復傾向となっている。来館などが困難な時期でも影響を受けない教材貸出が好調であったので、全体の利用者数はコロナ禍以前と比べても遜色がないレベルであった。

○ サポーター活動について

当館にとってなくてはならない活動であるため、コロナ対策のもとで実施した。

○ レファレンス活動について

原則電話やメールでの応答とし、来館される場合はマスク着用、消毒などの対策のもとで実施した。

(5) 学校の休校や外出自粛などへの対応

○ 「バーチャルミュージアムinやまはく」

2020年度から開始した「バーチャルミュージアムinやまはく」は、2021年度もテーマ展「宝山の一角」を追加し、特別展の特設サイト開設も含めてさらに充実している。

また当館職員による自前のバーチャルミュージアムだけにとどまらず、2020年度にコロナ対策の1つとして文化庁に認定された事業が2020年度末に完成し、当館ホームページ上において「ミュージックミュージアムinバーチャルやまはく」として公開することができたため、全国的にみても遜色のないバーチャルミュージアムを構成することができている。

さらに2021年度は、コロナ対策ということだけではないが、展示・収蔵品のデジタル化事業が県の事業として認められ「バーチャル収蔵庫」として約500点の貴重な資料を2021年度末の公開に向けて準備中である。今後は、これらも含めて「バーチャル山口博物館」として整理していく予定である。

これらの対応のうち、2020年度末に完成した「ミュージックミュージアムinバーチャルやまはく」について以下に詳報する。

(6) 「ミュージックミュージアムinバーチャルやまはく」

① 事業の全体像について

この「ミュージックミュージアムinバーチャルやまはく」は、文化庁令和2年度文化芸術収益力強化事業の1つとし公募された「デジタル技術を活用した映像配信による新たな収益基盤の確保・強化事業」に当館が応募して採択されたものである。

・対象分野

舞台芸術（音楽、舞踊、演劇、伝統芸能、その他）博物館等（美術、自然史）

・応募書類の提出期間（公募期間）

令和2年10月12日(月)～令和2年10月23日(金)

・事業概要(公募要領より一部抜粋)

本事業では、文化芸術団体の事業構造の改革を促し、活動の持続可能性を高めるために、各分野の特性を活かした新しい収益確保・強化策を実践し、その費用対効果等を検証することで、文化芸術団体の持続的なあり方を検討する。

○ 新型コロナウイルス感染症の感染拡大により、リアルでの公演・展示が難しくなったコ

<演奏・撮影関係>



画像5 植物動物展示室での撮影・演奏



画像6 天文展示室での撮影・演奏

<完成画面>



画像7 ミュージックミュージアム入口



画像8 天文展示室解説タグ付け画面



画像9 動物ジオラマ探検の画面



画像10 仁保隕石360° 3D画像

ンテンツを、オンライン化・バーチャル化し、新たな表現の場を創出する。

- 新たなビジネスモデルにより収益力を強化し悪化した経営状況の改善につなげる。
 - 本事業をきっかけに、収益力向上に向けた各団体内部での体制の強化・意識の改善を図るとともに、業界全体の収益構造の改善を図る。 (以下省略)
- ② 当館の請負内容について

文化庁事業の概要と当館の請負内容

《国の事業》デジタル技術を活用した映像配信等による新たな収益基盤の確保・強化事業。
舞台芸術団体や博物館等を対象に、公募により、デジタル映像配信による観覧収入等を確保する取組を実施

《当館の事業》ミュージックミュージアムinバーチャルやまはく推進事業 (MMやまはく)

- ア 館内 (展示室) でアルミ製のバイオリン&チェロコンサートを実施・収録 (無観客)
- イ 主要な資料 (14点) を360° 高精細映像等で撮影。展示室も同様に3D撮影
- ウ ウェブサイトで、①の映像・音楽を背景に、②の資料・展示室を紹介 (無料配信)

③ 個別の事業概要について

ア アルミ製バイオリン&チェロコンサート

【使用機材】当館の「すごいおもちゃコーナー」に展示している打ち出し板金技術で製作したアルミ製のバイオリンとチェロを(株)山下工業所 (下松市) から借用して使用

【演奏者】山口県交響楽団に協力していただき、2名の演奏者が参加

【演奏曲】カノン、喜びの歌などクラシック8曲を演奏

【撮影方法】今回の事業の対象が自然系の博物館ということであったので全7分野の展示室のうち理工、地学、天文、植物・動物展示室の5展示室内の展示資料前で撮影

イ 展示室と展示収蔵資料の3D撮影

【撮影する資料】14点。山口県に特にゆかりのあるヤベオオツノジカ骨格標本、花こう岩の晶洞、玖珂隕石、アナグマ、ツバキなど

【撮影方法】360° 高精細3D映像。隕石は落下の様子をCGで再現

【展示室】5展示室と天文ドームをウォークスルー体験できる3Dで撮影。資料映像をタグ付け。

「ミュージックミュージアムinバーチャルやまはく」は、当館のホームページのトップページの以下のバナーからリンクしているので、ぜひご実際の画面をご覧ください。



画像11 「ミュージックミュージアムinバーチャルやまはく」バナー

④ 事業の効果等について

◇配信開始後のホームページ閲覧件数は、配信前年の同期間と比べ 49%増と大幅にアップした。

・配信後（令和3年2月8日から4月30日まで） 20,719件

・配信前年（令和2年2月8日から4月30日まで） 13,909件

（※令和2年（配信前年）は、3月6日から3月26日、4月14日から5月24日まで臨時休館）

◇観覧者アンケート（2021年4月実施）では、

・全体的に「満足」「やや満足」が…………… 86%

・「体験して博物館に行ってみたくなった」が…………… 76%

・「家族や友人に勧めたい」が…………… 86%

・「博物館の新しい魅力が発見できた」が…………… 74%

（いずれもそう思う、ややそう思う、を含む）

4 おわりに

2021年度もまたコロナ禍に振り回されて終わろうとしている。当館に限らず全国各地の博物館でも同じようにコロナの影響を受け、コロナ対策に明け暮れた2年間になってしまうのではないだろうか。

ただ、前回の研究報告でも述べたが、必ずしも暗い話題ばかりではなく、これを機会にさまざまな工夫を凝らして集客につなげたり、デジタル化を進めつつあったりするなどのコロナ対策を工夫した館も多いのではないだろうか。

デジタル化の推進、バーチャル化の推進については、それぞれ思うところがあるであろうし、博物館としてはこれらにエネルギーを取られて本来の調査研究がおざなりになってしまえば足をすくわれかねない事態になることは容易に想像できる。しかし、コロナ禍での外出規制に限らず博物館に行きたくても館に行けない人はもともと多かった。子どもが小さくて大変、あるいは子どもだから行けない、時間がない、遠すぎて行けない、体に障害があって行きにくい、などさまざまな理由で館に行きにくいという人に、せめてデジタルだけでも見ていただきたい、という思いが実現できたことをプラス面として捉えておきたい。そのうえで博物館がもつ本物の魅力とデジタルの魅力を融合させてさらに内容のレベルアップを目指すべきだと考えている。

2021年12月に、当館から車で往復4時間以上はかかる離島（橋でつながっている）の小学校とオンラインで結んで植物の出前授業を実施した。このときは、1名（MT：ミュージアムティチャー）が現地に貴重な植物標本（貸し出しもしていないオオミヤシの実の標本など）を持っていき、学芸員が博物館からその標本の解説や事前に撮影しておいたその島の植物の説明をするという方法を試行した。現地に行ったMTが実物の標本を見せるなどアシストし、その後は葉脈標本づくりを現地で実施した。

同じようなケースとして、貸し出し教材で化石レプリカづくりを体験させながら、学芸員が地学展示室にあるティラノサウルスの実物大レプリカやさまざまな化石の解説を博物館あらいふで解説するというパターンでの授業も実施した。これらの方法ではまさにリアルとバーチャ



画像12 オオミヤシの実物観察



画像13 博物館からのオンライン解説

ルの融合で博物館ならではの授業ができたように思う。

他にも博物館の天文ドームと学校をつないでのオンライン授業も試行した。これも大変好評でコロナ禍での今後の活用に期待もてる。こちらの方法では日頃は立ち入れない天体ドームの大型望遠鏡をリアルタイムで授業に使えてこれまでの出前授業にはない利点も見られるが、画面上で完結する授業となってしまうため、本物（実物）での体験をどう織り交ぜていくかという課題もあるように思う。

2021年度末には、歴史展示室にある松下村塾を模したコーナーを中心に展示内容をタッチパネルなどで詳しく学べるようにデジタル化する「デジタル松下村塾」や未公開の収蔵品を撮影してバーチャルで見られるようにする「バーチャル収蔵庫」という新しいデジタル化事業も完成する見込みである（本格運用は2022年度になる）。

（※2021年度「バーチャル収蔵庫」については、本研究報告の「ミュージックミュージアムin バーチャルやまはく」と「バーチャル収蔵庫」の開設と概要について 漁剛志著）において別途詳報している）

これらは国や県におけるデジタル化の推進にともなって実現したものであり、ともすればデジタル化・バーチャル化に頼る方向になりかねないが、前述したようにコロナ禍で博物館運営が苦しい中でまた1つの光明となることも事実である。このような事業を博物館ならではの取組みと言えるようにリアルとの両立を図りながら有効に活用していくことが、コロナ禍の影響を最小限にとどめるだけでなく、ウイズコロナ、アフターコロナに向けての対応も含めた当館の今後の課題であり、使命でもあると考えている。

参考文献

杉江喜寿. “新型コロナウイルス感染症の感染拡大による山口県立山口博物館の運営への影響と対応” 山口県立山口博物館研究報告, vol.47. 山口県立山口博物館, 2020, p.99-113.